

## 建内宿祢系譜とその物語

高 寛 敏

はじめに

1. 建内宿祢をめぐる諸説
  2. 記の建内宿祢
  3. 紀の武内宿祢
- おわりに

キーワード：葛城長江曾都毗古、蘇我馬子、  
日子坐王系譜、中臣鎌足

はじめに

『古事記』・『日本書紀』（以下、記紀）によると、孝元の孫である建内（武内）宿祢は、多くの著名な氏族の祖であり、類例のない程長命な人物である。実在の人物でない建内宿祢がこのような位置を占め、そのような人物像を呈するようになった事情は、記紀成立過程の複雑さに関係すると思われる。

筆者は今まで、記紀の五世紀以前の王統系譜と物語について言及し、それは欽明代の系譜(一)・物語(一)、推古代の系譜(二)・物語(二)、天武・持統代以後の系譜(三)・物語(三)と、三段階を経て発展し、さらに記紀それぞれの完成過程を経たもの

であることを説いてきた<sup>(1)</sup>。建内宿祢系譜とその物語も、そのような記紀成立過程に相応して発生発展したものであることが予見されるが、以下はその検証のための試みである。

### 1. 建内宿祢をめぐる諸説

孝元記系譜などによる、記の建内宿祢関係系譜（以下、「系譜」）を図示すると、次頁のようである<sup>(2)</sup>。

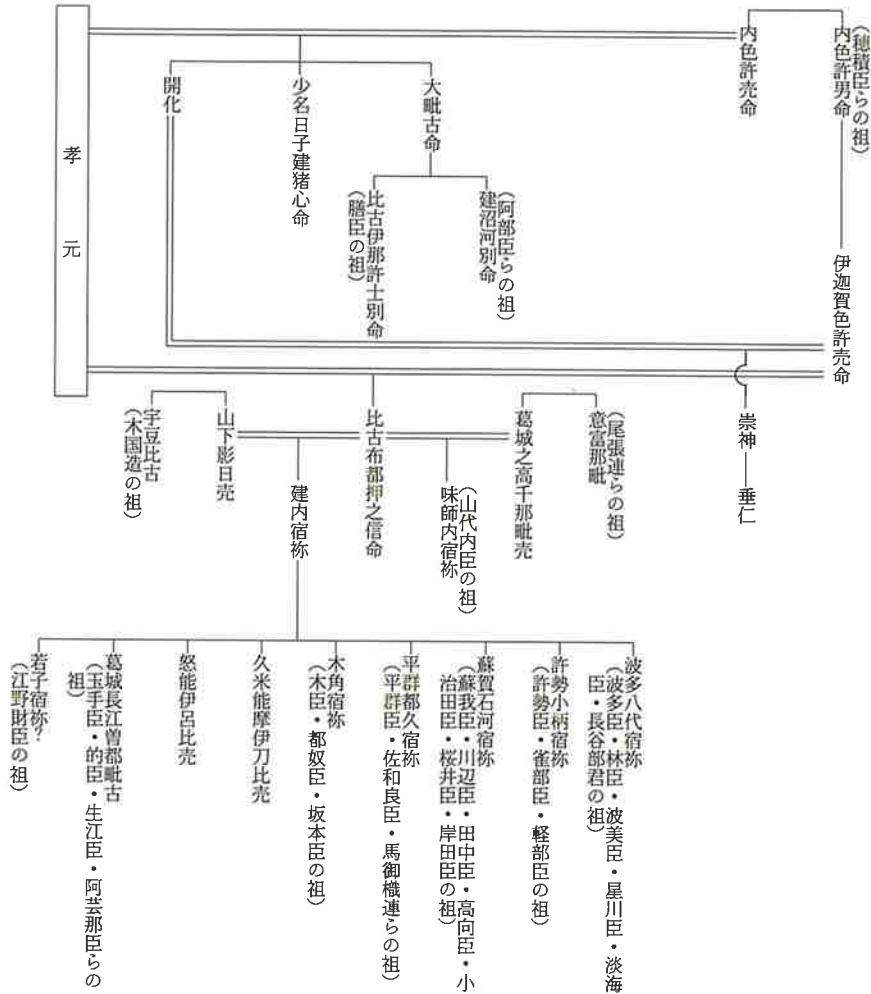
「系譜」については、早く津田左右吉氏の見解があり<sup>(3)</sup>、今日も研究の出発点となる。津田氏によれば、建内宿祢を始祖とする系譜は、基本的には蘇我氏によって推古代につくられたものであるが、ウジ名をもたない第九子の若子宿祢は、末弟という程の意味で、後に添加されたものである。また、某宿祢を称する第一子から第五子は、蘇我氏とその影響下にあった氏族の祖先を一括したものであるが、「宿祢」のない葛城長江曾都毗古はそれとは区別され、欽明代の「帝紀」にその名のあった人物である。それをここに一括したのは、「蘇我氏が葛城の地方

(1) 拙稿(A)「神功物語の形成」(近刊)、(B)「日本古代の建国神話と朝鮮」(『朝鮮大学校学報』3、1998年)、(C)「倭建物語の形成」(『東アジア研究』20、1998年)、(D)「五世紀、倭国の王統譜とその物語」(『東アジア研究』21、1998年)

(2) 記紀の関係系図については、佐藤治郎「武内宿祢伝承とその後裔氏族」(鶴岡静夫編『古代王権と氏族』名著出版、1988年)の図を参考にした。

(3) 『津田左右吉全集』2、岩波書店、1963年、108～116ページ

「系譜」(系譜三)



を領有することに遠い歴史的由来のあることを示すためであった」。そして蘇我氏がこの「系譜」をつくったのは、欽明代の「帝紀」の間もない後のことなのであるが、葛城長江曾都毗古の後裔に葛城臣が見えず、確実な葛城臣の例が崇峻紀の葛城臣烏那羅であるから、それが「系譜」成立の下限となるのである。

津田説は、「系譜」分析の着眼点を指摘し、かつ「系譜」は、葛城地方領有を主張する蘇我

氏の意向を反映しているとした点で、継承すべき卓見と思われるが、蘇我臣の祖先の蘇賀石河宿禰が他の人物と同列に並べられていて、それも筆頭でないことからして、「系譜」自体に蘇我氏の主導性を確認しえないのが難点であって、葛城臣のみえない理由とともに、再考の余地を残したといえる。

若子宿禰が後の添加であることについては直木孝次郎氏の説もある<sup>(4)</sup>。それによると、若子

(4) 直木孝次郎「巨勢氏祖先系譜の成立過程」(同『日

本古代の氏族と天皇』塙書房、1964年)

宿祢以外の人物は、記の一般の系譜記載方法に準じて「次」で接続され、名前の下に「者」字をもつのに、若子宿祢だけはそうっていない。それは記撰進後の追記の可能性すらあるのである。

「系譜」の成立を蘇我氏に結びつける津田説をそれぞれにおし進めた論としては、日野昭・岡本堅次・志田淳一・直木孝次郎氏の論があるが<sup>(5)</sup>、津田説の難点を解消してはいない。そこで津田説を否定する見解が岸俊男氏によってまず提起された<sup>(6)</sup>。岸氏は、「その伝承が七世紀中ごろ以後に帝紀に加えられたと推定される成務・仲哀・神功の時代のこととおもに語られていることを勘案すれば、建内宿祢伝承そのものの成立発展についても、従来考えられていた蘇我氏との関係よりも、むしろ鎌足との関係がより重視され、時代的にも少し降った七世紀後半が一つのポイントとして想定されてくる」として、「内臣」たる中臣鎌足像を参考にして、「たまきはる内の阿曾」たる建内宿祢伝承がまず成立し、その後、孝元や建内宿祢九子が系譜に結びつけられたと説いた。しかし、成務や神功が王統譜に登場するのは系譜(二)のことであるから<sup>(7)</sup>、岸説には根本で疑問が残る。

次に塚口義信氏は<sup>(8)</sup>、建内宿祢後裔でもない中臣氏が建内宿祢に関する理由はないとして岸説を批判しながら、建内宿祢に一次的に関ったのは葛城臣と紀直で、それは雄略代のことであり、五宿祢は推古代に登場したとする。五宿祢の登場については、蘇我氏らが「葛城氏の始祖の人

物にその出自を求め」たためであり、葛城臣がみえないのは、この頃に葛城氏が没落していたからとする。しかし、蘇我氏らが葛城氏の始祖的人物にその出自を求めておきながら、葛城臣を削るなどということは考えがたい。葛城長江曾都毗古の後裔は、ほとんど史上にみえないから、没落を理由にするなら、他の後裔氏族の名も削除されて然るべきであろう。そもそも葛城長江曾都毗古なる人物は、系譜(二)で始めて登場した人物であり<sup>(9)</sup>、その「長江」は履中の「大江之伊耶本和気」の「大江」をにらんでの造名である。また木国造(紀直)の登場も、後述のように、それは系譜(三)のことと考えられるのである。

また最近、管野雅雄氏は意表をつく新説を展開し、「系譜」と蘇我氏との関係を否定した<sup>(10)</sup>。管野氏は、津田氏が指摘した「系譜」の問題点を念頭に置きながらも、葛城長江曾都毗古と若子宿祢を後次の追記とするのであるが、その根拠は次のようである。即ち、葛城長江曾都毗古は仁徳妃の石之比売の父であるから、石之比売は「系譜」によると孝元四世孫となり、後の規定でも「皇族」である。ところが、『続日本紀』天平元年(729)8月壬午条の光明子立后についての「詔」には、「葛城曾豆比古女子伊波之比売命皇后」を臣下の女としながら、皇族でない女性の立后(光明子立后)の先例としているが、これは「系譜」とは矛盾する。その原因は、光明子立後に反対する長屋王が、728年10月から729年1月までの間に、葛城長江曾都毗古と

(5)日野昭「武内宿祢とその後裔」(同『日本古代氏族伝承の研究』永田文昌堂、1971年)、岡本堅次『神功皇后』(吉川弘文館、1959年、129～147ページ)、志田淳一「武内宿祢伝承の成立」(『歴史評論』136、1961年)、直木孝次郎「武内宿祢伝説に関する一考察」(同『飛鳥奈良時代の研究』塙書房、1975年)

(6)岸俊男「たまきはる内の朝臣」(同『日本古代政治

史研究』塙書房、1966年)

(7)注(1)拙稿。

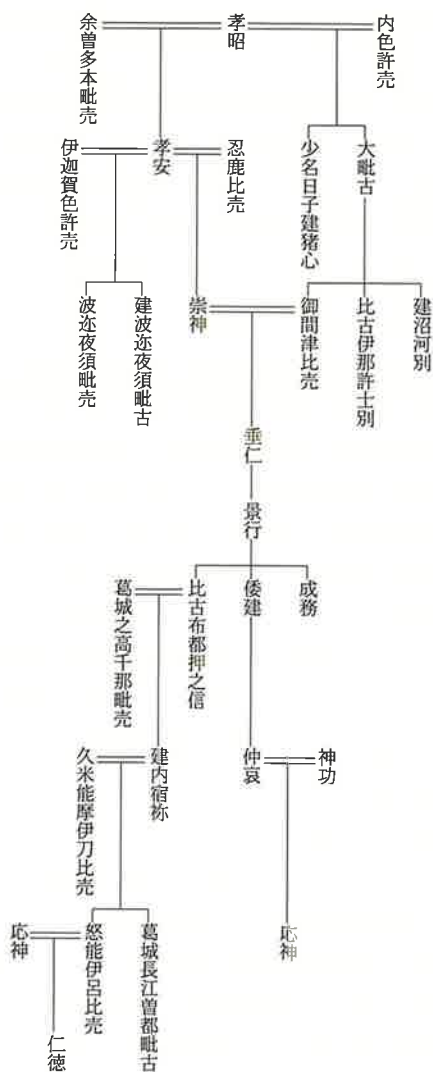
(8)塚口義信「武内宿祢伝承の形成」(同『神功皇后伝説の研究』創元社、1980年)

(9)注(1)D)拙稿。

(10)管野雅雄「孝元記系譜の一問題」(古事記学会編『古事記研究大系』1、高科書店、1997年)

このほかにも、系譜の原型は、葛城氏の滅亡した直後の五世紀末から、蘇我氏政権の基礎が確立した六世紀末までの一世紀間にはぼ成立したが、建内宿祢の人物像は七世紀以後に創造されたとする本位田菊士説<sup>(11)</sup>、宇智地方の英雄、「内宿祢」を素材として、紀路や曾我川を通じてともに「朝鮮経営」にあたった諸氏の同族意識に基づき、建内宿祢の原型が成立したとする和田萃説<sup>(12)</sup>、建内宿祢もとの原像は、紀氏の英雄伝承を土台にしてまず成立し、さらに五宿祢後裔氏族の英雄伝承を加えて多彩になり、その後（「推古朝から天武朝」の間）に葛城長江曾都叱古が付加されたとする佐藤治郎説<sup>(13)</sup>、建内宿祢は七世紀中葉以後の後裔遣新羅使の投影とみる清祐義人説<sup>(14)</sup>などがあるが、いずれも系譜自体の分析が弱く、説得力に欠ける。結局、津田氏が指摘した「系譜」分析の着眼点を参考にし、「系譜」成立過程を新たに考究する他ないのである。

系譜(二)



「系譜」は建内宿祢を孝元の孫としているが、孝元は系譜③の産物であるから<sup>(15)</sup>、「系譜」と

(15)注(1)(B)拙稿。

は系譜(㉒)のことなのである。ここでは蘇我臣の祖を蘇賀石河宿祢としているが、この人物は、天武10年前後に蘇我臣から石川臣へと改姓し、天武13年に石川朝臣となった、蘇我連子の家系が創出した人物と思われるので、蘇賀石河宿祢は系譜(㉒)で建内宿祢の子とされたのである。五宿祢の後裔の同祖系譜は、推古代以後、徐々に形成されたものであろうが、五宿祢がみな建内宿祢の子とされたのは、やはり蘇賀石河宿祢が登場した時で、それは系譜(㉒)で共通の「宿祢」を付されて一括してそうされたとすべきである。持統5年8月に墓記を奏上した一八氏のなかに、羽田(波多)、巨勢(許勢)、石川(蘇我)、平群、紀伊(木)と、五宿祢の氏がすべてみえるのは、それを傍証するものといえるであろう。五宿祢が建内宿祢の子とされたのが系譜(㉒)であるなら、それと区別される葛城長江曾都毗古こそ、系譜(㉒)では建内宿祢の子の筆頭であったのであり、それが五宿祢の付加によって、末子の座に追われたのである。

葛城長江曾都毗古とその祖先の伊迦賀色許売は系譜(㉒)に初めて登場した。したがって、この両者の間を埋める建内宿祢と比古布都押之信も系譜(㉒)に登場していたのである。系譜(㉒)の関係系譜は前頁のように図示される<sup>(16)</sup>。

まず建内宿祢の世系上の位置であるが、系譜(㉒)ではそれは仲哀代であった。そのことは、神功・応神の股肱の臣としての物語でも察せられるが、子の葛城長江曾都毗古が応神代で、怒能伊呂比売が応神妃の葛城之野伊呂売(応神記)と同一人物であることで、決定的である。この怒能伊呂比売は系譜(㉒)ではおそらく仁徳の母であり、仁徳の母が中日売となったのは系譜(㉒)のことであると思われる。

系譜(㉒)では建内宿祢の祖父が景行であったことは、世系上からみても確かであるが、具体的には次のような過程が考えられる<sup>(17)</sup>。即ち、系譜でタラシ系倭王として景行・成務が新たに登場し、その景行・成務の妃を補うために原日子坐系譜がつくられた。それを一部改編した前日子坐系譜は丹波の比婆須比売を景行妃としていた。日子坐系譜に特徴的な人物はヒコ某なる名の人物であるが、建内宿祢の父、比古布都押之信ももとは日子坐系譜に関係した人物で、系譜(㉒)(前日子坐系譜)では成務とともに景行と比婆須比売の間の子とされていたのである(倭建は異母兄弟)。ところが系譜(㉒)(日子坐系譜)で、比婆須比売は一代上げられて、垂仁妃で景行の母と改変された。そこで系譜(㉒)では兄妹であった八尺入日子と八坂入日売を、後者は前者の女と改変して成務の母とし、比古布都押之信を分離して孝元に結びつけたのである。

孝元の子となったのにも理由がある。系譜(㉒)では内色許売は孝昭妃、伊迦賀色許売は孝安妃であった。それが系譜(㉒)で欠史後三代が挿入されると、内色許売と伊迦賀色許売はともに孝元妃とされ、さらに後者は、開化妃で崇神の母ともなったのである。そのため系譜(㉒)の伊迦賀色許売の子、建波迹夜須毗古と波迹夜須毗売はその位置を追われたのであるが、この時に孝元妃としての伊迦賀色許売の子として、「ヤマトネコ」天皇の子孫を飾る目的もあって、建内宿祢の父、比古布都押之信が結びつけられたのである。内色許売・伊迦賀色許売系譜と、比婆須比売・比古布都押之信系譜は連動していたのである。かくして建内宿祢は系譜上では垂仁代、物語では仲哀代の人物となったのであるが、これが長寿の人としての建内宿祢像の始まりとなっ

(16)この上部系図については、注(1)(B)拙稿参照。

(17)以下については、注(1)(C)拙稿参照。

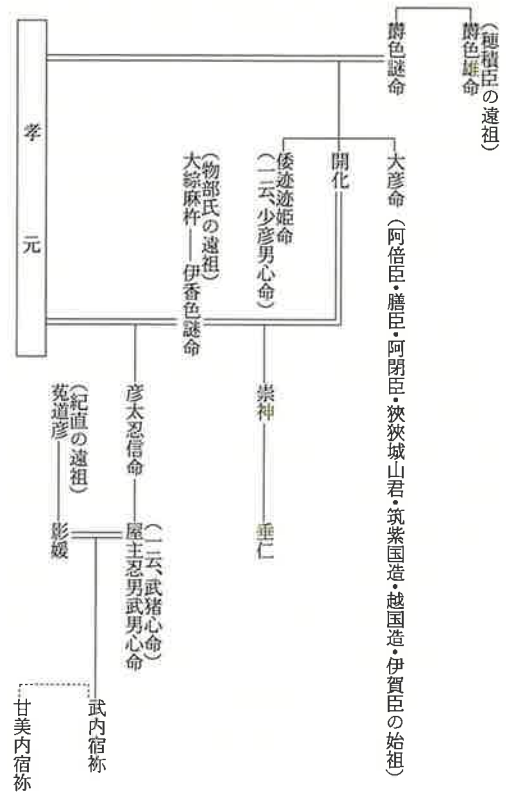


系譜(三)の最大の目的は、系譜(二)に反映された蘇我氏のこのような主張を否定することにあった。蘇我氏の始祖を葛城氏から切り離したのはそのためであるが、葛城色を弱めることにも意を用いた。葛城長江曾都毗古の後裔から葛城臣を消去し、怒能伊呂比売を仁徳の母の位置から追放した。建内宿祢の母も葛城之高千那毗売であったのが、木国造出身の山下影日売へと改変

された<sup>(20)</sup>。武内宿祢の妻の名もあったと思われるが、それは系譜(二)で建内宿祢の女とされた久米能摩伊刀比売であったと想像される。系譜(三)はこの女性が建内宿祢の妻としてはふさわしくないと判断したのであろうが、「久米」は系譜(二)・物語(二)では特別な意義が付与されていたのである<sup>(21)</sup>。

### 3. 紀の武内宿祢

紀の武内宿祢関係系譜は次のようである。



(18)この部分は、注(1)④拙稿参照。

(19)木満致が葛城氏の女性と結婚して稲目を生んだことについては、拙著『古代朝鮮諸国と倭国』（雄山閣、1997年、122～125ページ）を参照。

(20)この点では、直木孝次郎注(5)論文が、「木国造」は天武代以後の新国造であると指摘したのが参照される。

(21)注(1)(D)拙稿参照。

紀の系譜は記と若干の相違がある。その第一は、鬱色謎の一子、倭迹迹姫は記では少名日子建猪心となっており、後者の名は倭迹迹姫の分注の「一云」に少彦男心とあるのに類似する。また、彦太忍信は記では武内宿禰の父であるが、ここでは祖父となっていて、父は屋主忍男武男心である。父には「一云、武猪心」の分注があるが、この武猪心も記の少名日子建猪心と類似する名である。これからすると、倭迹迹姫と屋主忍男武男心は一連の操作のなかで登場した人物のように見える。

断言はできないが、おそらくこの二つの「一云」は同一史料で、系譜(二)に手を加えた紀の原本であろうと考えられる。原本は、物語(二)では記のように、成務代から登場する武内宿禰が、孝元の孫ではあまりにも時代的不一致が甚だしいので、彦太忍信と武内宿禰の間に一代を挿入したのである。その際、鬱色謎の一子、少名日子建猪心という名に目を付け、それを少彦男心と武猪心の二名に分け、後者を武内宿禰の父としたのである。そしてわざわざ、武内宿禰出生記事を新たにつくったのであるが、それは景行紀3年条にみえるものである。

ト幸于紀伊国。将祭祀群神祇、而不吉、乃車駕止之、遣屋主忍男武雄心命（分注。一云武猪心命）、令祭。爰屋主忍男武雄心命詣之、居于阿備柏原而祭祀神祇、乃往九年、則娶紀直遠祖菟道彦之女影媛、生武内宿禰。

ここに景行が屋主忍男武雄心を紀伊に派遣して神祇を祭らしめたところのは、武内宿禰の母が木造（紀直）出身であるとされていたからである。そして分注によると、原本では武内宿禰の父を武猪心としていたのである。

ところが稿本は、おそらくは武内宿禰の父の名を荘重に飾るため、少彦男心を消去し、孝霊の女の倭迹迹日百襲姫・倭迹迹稚屋姫を参考に

して、その位置に倭迹迹姫を加える一方、少彦男心と武猪心、さらに彦太忍信をも参考にして、武猪心を屋主忍男武雄心としたと想像される。「屋主」は、神代紀上、第八段第六「一書」にみえる紀伊国の五十猛・大屋津姫・柁津姫三神、あるいは五十猛の別名ではないかとされる記の「木国之大屋毗古神」など、家屋に係する紀伊の神を参考にしたものであろう。完成者は稿本と原本との相違を問題にして、原本引用分注を付したのである。

武内宿禰の出生年を景行3年としたのは、もちろん編体年史書としての一応の本文をつくった稿本である。その年次は景行25年に武内宿禰を北陸および東方諸国に派遣したとするのに始まる、景行紀の一連の武内宿禰記事に相応するが、このことから、それらの記事はすべて稿本による造作であることがわかる。

記との相違の第二は、伊香色許謎が物部氏の大総麻杵の女となっているが、記では穂積氏の内色許男（鬱色雄）の女となっていることである。これは、孝元が内色許男の妹と女を同時に娶ったとある不自然さを解消するためのものであって、それは武雄心を挿入した原本の所業とみてよい。

記との相違の第三は、応神紀9年夏4月条に、武内宿禰・甘美内宿禰兄弟の争いの話がみえるが、記にはそれがなく、甘美内宿禰は武内宿禰の弟のように記載されていることである。紀によれば、天皇が武内宿禰を筑紫に遣わして百姓を監察させたところ、甘美内宿禰は「武内宿禰、常有望天下之情、今聞、在筑紫而密謀之曰、独裂筑紫、招三韓令朝於己、遂将有天下」と讒言したので、天皇が武内宿禰を殺そうとしたという。そこで武内宿禰は紀水門に逃れて天皇に訴え、探湯の結果、甘美内宿禰の陰謀にうち勝つのである。ここに「三韓」の語がみえ、それは

完成者が主に用いた語であるが<sup>(22)</sup>、話の全般的内容は稿本の造文のように思われる。武内宿祢が紀水門に逃れたとあることや、最後に甘美内宿祢を「紀直等之祖」に賜わったとあるのは、系譜を念頭に置いたものであろうし、また、筑紫で武内宿祢と瓜ふたつの「壹伎直祖真根子」が身がわりに死んだとあるが、「真根子」などはまさに話の筋からつくり出された名である。紀には景行25年・27年に、武内宿祢が北陸・東方諸国を監察した関連記事があるが、これも稿本の造文であることからしても<sup>(23)</sup>、筑紫監察に始まる甘美内宿祢記事は稿本の造文であることが確実である。神功紀47年・51年条の朝鮮関係記事にも建内宿祢は付加的に登場するが、それらの記事全体が稿本以下の造作文であることは別に論証した<sup>(24)</sup>。記にみえない話としては、仁徳紀元年条の仁徳誕生の奇瑞と、武内宿祢の子で平群臣の始祖、木菟宿祢と仁徳との名易えの記事があるが、これは系譜(二)を参考にした、平群臣氏家記を採用したものと考えてよいであろう。

稿本は武内宿祢による北陸・東方諸国・筑紫監察記事をつくり、武内宿祢の活躍を一層飾りたてた。それは『続日本紀』慶雲4年(707)4月壬午条所載の宣命に、中臣釜足(藤原大臣)を建内宿祢に比して称揚する一節がみえることに関係する。釜足は「内臣」に任ぜられた(孝徳即位前紀)ので、特に「たまきはる内の阿曾」(仁徳記)といわれた武内宿祢に比せられたと考えられるのであって、釜足の「内臣」から武内宿祢像を推定する岸俊男説<sup>(25)</sup>は逆であろう。八世紀初頭に、公的に釜足が武内宿祢に比肩す

る存在として公認されたことが契機となり、武内宿祢諸国監察記事が新たにつくられたのである。成務紀3年春正月条に、「初天皇与武内宿祢同日生之、故有異寵焉」の一文があるが、それと同様であろう。

記との相違の第四は、允恭紀5年7月己丑条に、葛城襲津彦の孫の玉田宿祢が反正の殯を司りながら、葛城で酒宴にふけり、その様子を探りに行った使者を殺したため、捕殺されたとあることである。これは葛城氏反逆物語ともいうべき内容であるが、そのような話がつくれるのは、物語(三)のことに相違ないと思われる。そうとすれば、記はこの話を省略したことになる。

記との相違の第五は、武内宿祢の本来の物語におけるものである。即ち、神功が筑紫より凱旋した後のこととして、記は香坂・忍熊二王の反乱について述べ、それを討伐した人物を「丸迹臣之祖、難波根子建振熊命」としているが、紀は「武内宿祢・和珥臣祖振熊」の二人としながらも、その後は武内宿祢を主人公としていることである。それは記にみえる、

いざ吾君 振熊が 痛手負はずは 鳩鳥ノ淡  
海ノ海に 潜きせなわ

という歌謡が、紀では、

いざ吾君 五十狹宿祢 たまきはる 内の阿  
曾が 頭槌の 痛手負はずは 鳩鳥ノ潜きせ  
な

となって、記の「振熊」が紀では「内の阿曾」となっている点にも反映されている。この点につき吉永登氏は、振熊を主人公とする記の方が原伝で、武内宿祢を主人公とする紀の所伝は蘇我氏によって改作されたものとする<sup>(26)</sup>。しかし、

(22)拙稿『『日本書紀』の〈三韓〉』(注(19)拙著)。

(23)このことは前述したが、注(1)(B)で詳述した。

(24)注(19)拙著、100～122ページ。

(25)岸俊男注(6)論文。

(26)吉永登「振熊から内の朝臣へ」(『万葉—その異伝発生をめぐって—』関西大学文学部国語国文学研究室、1955年)



神功と武内宿祢は蘇我氏によって、ともに系譜(二)で創出された人物であり、ワニ氏が五世紀以前の王統譜に関係するのは、やはり系譜(二)以後のことである<sup>(27)</sup>から、吉永説には賛成できない。どだい、神功物語にワニ氏の建振熊が登場すること自体、話の展開としては如何にも唐突であり、主人公は筑紫から一貫して神功に同行した武内宿祢であってこそ自然なのである。

物語(二)では、征討の主人公はやはり武内宿祢であったと思われる。それが「丸迹臣之祖、難波根子建振熊命」となったのは、武内宿祢の母を葛城氏から木造氏へと改変した系譜(三)・物語(三)の時のことで、ここで武内宿祢はきわめて二次的な人物に転落させられたのである。「難波根子」というのも、「ヤマトネコ」を前提にしたもので、七世紀末の命名であろう。「建振熊」の「建」は建内宿祢の「建」にならい、「振熊」は「忍熊」とともに、物語(三)で付加された人物

と考えられるのである<sup>(28)</sup>。ところが、紀で武内宿祢がまた復活するのは、中臣鎌足が武内宿祢に比せられたことを前提にしたもので、またそれが話としても自然であったからである。記の所伝は原伝を改変したものであり、また記から紀への改変は、他のいくつかの武内宿祢記事が追加された紀の稿本の段階といえるのである。

## おわりに

建内宿祢の系譜とその物語も、王統譜とその物語の形成過程の一環として、成立し発展していった。それは蘇我氏の意向を反映しながら、七世紀前半に第一次的に成立したのであるが、その内容はタラシ系倭王の創出と葛城系倭王の架上とに深く関わっていたのである。記紀の物語は系譜の物語であることを、改めて確認する次第である。

(27)注(1)(C)・(D)拙稿。

(28)注(1)(A)拙稿。

